

— 研 究 —

19世紀ポーランド王国の資本主義工業¹⁾

— ウッジ地帯における繊維工業の成立 —

藤 井 和 夫

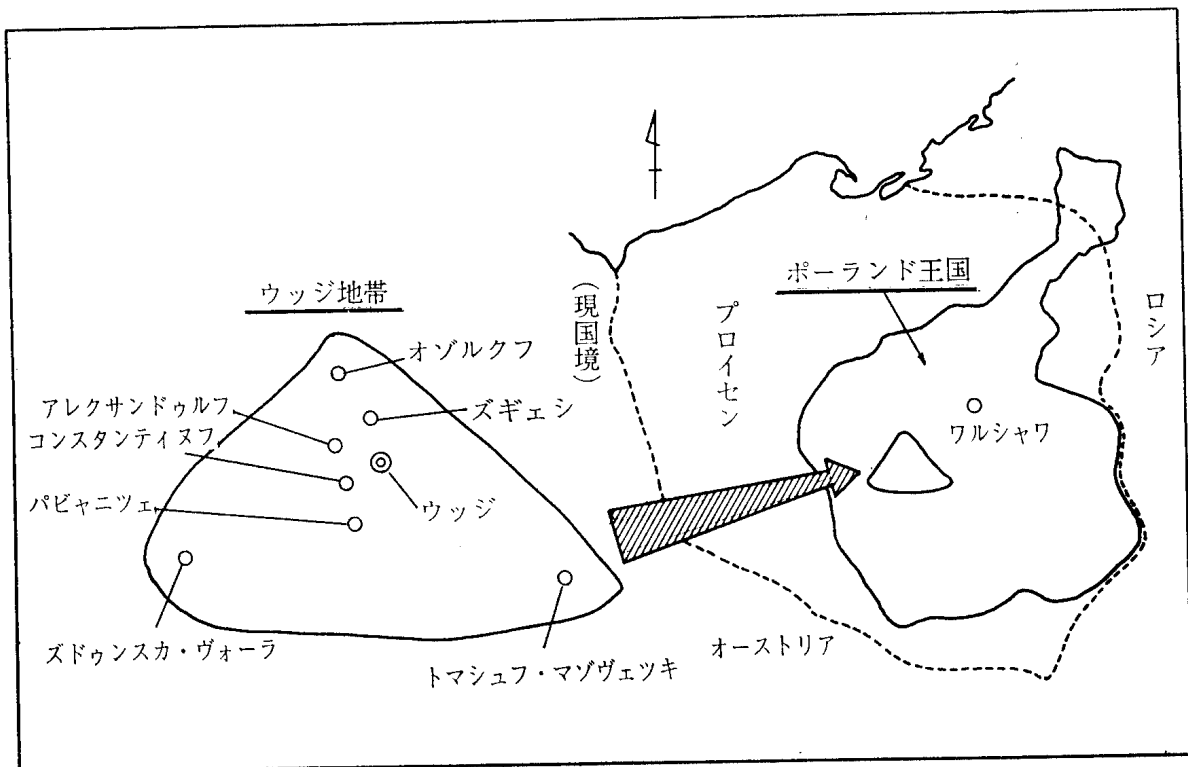
I 序

18世紀の末に、ロシア・プロイセン・オーストリアの三国分割によって地図の上から姿を消し去ったポーランドは、1807年に建設された「ワルシャワ公国」²⁾を経て、やがて1815年のウィーン会議において「ポーランド王国」³⁾として復活した。この王国はそれ以後約1世紀にわたって存続したが、その歴史は民族自立をめぐる多彩な政治的事件に彩られている。一方、経済の局面に目を向けると、19世紀を通じて繊維工業を中心とするめざましい資本主義工業の発展を見出すことができる。

本稿の課題は、わが国では従来ほとんど注目されることのなかったこのポーランド王国時代の資本主義工業、とりわけ最も重要な繊維工業の成立に焦点をあてて、その実態と特質を明らかにすることにある。考察の対象は王国成立時から1860年に至る成立期のウッジ

- 1) 本稿は、社会経済史学会全国大会（於：創価大学，昭和53年5月20日）における同標題による報告に基くものである。小論の掲載にあたって、レフェリーから数多くの有益な御教示を頂いた。記して謝意を表したい。むろん、内容に関する責任は一切筆者が負うものである。
- 2) **Księstwo Warszawskie**. ティルジットの和約（1807年）において、ナポレオンの勢力下にザクセン王フレデリック・アウグストを統治者として成立。その後ナポレオンとその短い運命を共にした。
- 3) **Królestwo Polskie** あるいは **Królestwo Kongresowe**. 旧ワルシャワ公国領を基礎とし、ロシア皇帝アレクサンドル1世を王として成立。人口330万人，面積127,500 km²。この王国は当初かなり自由で主体的な権力を保有しており、独自の憲法・国会・政府・軍隊を持っていたが、1830年の「11月蜂起」以後その自主性は失われた。
- 4) 主なものはさきの「11月蜂起」と1863年の「1月蜂起」である。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業



地帯であるが、この地域は繊維工業の中核を担う王国最大の工業地帯であるとともに、その成長の歴史は王国資本主義工業成立・発展の典型をなしている。¹⁾

ポーランド王国の工業は、王国政府による工業育成策を起点として1820年代にまず羊毛工業からその成長を開始しており、30年代初期に一旦停滞した後、40年代にかけて綿工業へ工業構成の重心を移しかえつつ態勢を立て直し、やがて、50年代から本格的に開始された王国内外の鉄道網の建設・農奴解放(1864年)を頂点とする農業変革・ロシア政府による強力な保護関税としての意味をもつ金関税の導入(1877年)などが要因となって70年代からの飛躍的な発展期を迎えることになる。²⁾

その繁栄をもたらした最も基本的な要素として、従来製品販売市場としてのロシアの存

- 1) すなわち、地帯の成立自体が政府の政策的な意図に基くものであること、外国人企業家・労働者の移入が大きな役割を果たしたこと、ロシア市場に深く結びつくことによって急速な発展を遂げたことなど、王国工業の主要な要素を一身に具現しているのである。なお拙稿「ポーランド王国における繊維工業の成立——ウッジ地帯の労働者構成(1815—1870)——」、『関西学院経済学研究』、第9号、昭和51年、68ページ参照。
- 2) 王国における最初の鉄道は1845年から48年にかけて建設されたワルシャワ—ログフ線(119.5km)で、その後59年にはウィーンと、62年にはペテルスブルクと、72年にはモスクワとそれぞれ結ばれている。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

在が重視されてきたが、本稿の対象時期たる繊維工業成立期についていえば、王国政府による積極的な工業育成策と当時のポーランド王国を取り巻く関税事情に注目せねばならない。¹⁾

II 工業育成政策と関税事情

ポーランド王国は前述のようにかなり自主的な政府をもって誕生した。過去、強力な中央権力を欠いたために萌芽的に発生した封建領主によるマニュファクチュアすら十分に発展せしめえなかったこの国に、ようやく工業の育成を担うべき政策主体が確立されたのである。しかしながら、それに対応すべき国内基盤はほとんど形成されていなかったといってもよい。従って、工業創出の努力は国外からの工業・手工業の積極的導入という形を取らざるを得なかった。

まず移住者優遇策として、1816年に皇帝アレクサンドルの布告により、ポーランドへ移住してくる手工業者に対し6年間の租税・地代の免除、移住者とその息子の兵役免除、動産の無関税輸入の許可、ならびに外国人工業家の入植に対する年額4500ルーブルの援助が決定された。続いて1820年にはウッジ市に対して布告が発せられ、同市が低額地代の永代借地を最初の6年間は無料という条件をつけて織物業者をはじめとする手工業者のために準備すること、晒布工場のために付近の水車と土地を提供すること、建築資材を共有林から無料で割り当てること、建築用の安価なレンガ製造のため同市がレンガ工場を建設すること、手工業者等の移住に際し彼らの動産の無関税持込みを許可すること、移住者の便宜のためプロテスタント派の教会・牧師館の建設を計画し補助金を与えること、その他必要なあらゆる処置や資金の準備をすることが命じられた。さらに1822年には、移住者にとってただひとつ残されていた軍隊への舎営義務も免除され、1833年には建築資材の無料提供が10年間延長された。工業育成のための基金も1822年45,000ルーブル、23年90,000ルーブル、以後年々127,000ルーブル支出されている。²⁾

- 1) なお、以下本稿全体にわたって、工業と手工業、工業労働者と手工業者は必ずしも明確な区別と使い分けをしていない。多くは使用した原史料の不明瞭さによるものである。
- 2) 以上は主として、K. Schweikert, *Die Baumwoll-Industrie Russisch-Polens*, 1913, Zürich u. Leipzig, S. 49 ff. による。こうした政令による工業移植の試みは、王国商工業発展に大きな役割を果たした当時の大蔵大臣ルベツキ K. Lubecki-Drucki や、ウッジ地方の属する州委員会議長レンビェリンスキ R. Rembieliński などの熱心な働きかけに負うところが大きかった。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

こうした手厚い保護による移住手工業者を核として繊維工業成立の端初が開かれ、やがてそれは王国領内に新しい工業都市を生み出し、一大繊維工業地帯つまり本稿の対象たるウッジ地帯として結実してゆくわけであるが、そこにはもうひとつ、当時のポーランド王国をめぐる有利な関税事情が作用していた。

成立当初の自主的なポーランド王国政府は関税についてもまた主体的に政策を展開することができた。当時ロシアは特に1822年以降諸外国に対し高率の保護関税政策をとっていたが、一方ポーランド王国は、1815年のその成立にあたって前身のワルシャワ公国領の一部をプロイセンとオーストリアに編入されたこともあって、それらの地方との旧来の商業関係を維持するため両国と極めて低い関税率を取り決めていた。さらに1822年と24年にはそのポーランド王国とロシアとの間に、原料取引は無関税、自国産原料による製品は1%、外国産原料による製品には3%の従価税という低率の関税協定が結ばれた¹⁾。かくて、とりわけドイツ方面の商品にとっては、高率課税で遮断されたロシアの関税障壁を、プロイセン—ポーランド王国間の低率関税、さらにポーランド王国—ロシア間の低率関税というルートで通り抜けることが可能になったわけであり、一方ポーランド王国はあたかもロシア向けドイツ半製品の仕上げ工場としての位置を占めることになった。ドイツ方面からの手工業者・工業家の移住もこうした事情を背景にしていたわけである。

以上の関税環境は特にポーランド王国の毛織物工業を繁栄させたが、1830年の蜂起の結果、ポーランド王国とロシアとの間の有利な関税関係が終末を迎えると王国内の繊維工業はかなりの痛手をこうむり、その立ち直りと再発展のためには50年代以降の新しい局面を待たなければならなかった²⁾。

Ⅲ ウッジ地帯における工業都市の発展

ポーランド王国の繊維工業の発展は、大工業地帯としてのウッジ地帯においてその最大

1) *ibid.*, S. 61 ff.

2) その間の様子は、匿名論文 S[] G[], “Die industrielle Politik Rußlands in dessen Polnischen Provinzen,” *die Neue Zeit*, Bd. 2, 1894によると次のようであった。当初の有利な関税関係の下にロシアへの輸出は増加し続け、その額は1823年に2,659,000ルーブル、25年に5,202,000ルーブル、27年に8,179,000ルーブル、29年には9,886,000ルーブルに達した。しかし1830年の動乱が事情をすっかり変え、ロシアへの輸出は次の表のごとく激減してしまう。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

の成果を示すが、それは何よりも地帯内の諸都市のめざましい成長となって現れた。¹⁾

地帯の中心都市で「ポーランドのマンチェスター」と呼ばれるウッジ市は、14世紀前半にすでに村としての記録を有しており、同じ世紀の後半に市になったと思われるがその後の歴史ははっきりしていない。ともかく、同市の定住人口を示した第1表に見られるごとく、王国成立当初は人口千人に満たない極く小規模のありふれた小都市にすぎなかった。しかし1821年に工業移植のための新しい地区が設定されると、1823年から手工業者の入植が始まり以後40年間に約40倍という急激な人口増加が実現される。

ポーランドのロシアへの輸出額
(千ルーブル)

年次	毛織物輸出	輸出総額
1834	1,385	2,887
1835	1,285	2,544
1836	1,306	2,471
1837	1,466	3,135
1838	1,542	2,568
1839	1,686	2,629
1840	561	857
1841	582	819
1850	755	1,274

ibid. S. 789.

工業生産も1829年には紡績業のみで総額5,720,000ルーブルであったものが、50年には工業全体で6,000,000ルーブルにまで落ち込んだ。しかしながら1864年（農奴解放）以後再びポーランド工業の飛躍の時代が始まり、工業生産額も下のように上昇した。

ポーランドの工業生産

1866年	52,720,851	ルーブル
1869	59,655,494	
1870	61,869,140	
1871	64,669,223	
1872	73,451,319	
1873	84,715,767	

ibid. S. 790.

- 1) ウッジ地帯内の主要工業都市としては、ウッジ、パピャニツェ、ズギェシ、コンスタンティヌフ、トマシュフ・マゾヴェツキ、オゾルクフ、アレクサンドルーフ、ズドゥンスカ・ヴォーラの各市がある（付図参照）。パピャニツェ以下4都市についてはすでに拙稿「ポーランド王国における工業都市の成立——ウッジ繊維工業地帯4都市の事例——」、『関西学院経済学研究』、第10号、昭和52年、での分析があり、本稿はそれと一部重複する。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

同市の特色は工業部門が当初から綿工業に集中していることで、市の発展と綿工業との関係について1860年に当時の市長は次のように述べている。すなわち「ウッジ市の人口増加は、他の地方ではけっしてこのようには実現しなかったほど着実でありまた非常にめざましくて、この点でウッジ市はまちがいなく国内で唯一かつ独特の例を示している。市の成長の主な原因は綿工業であり、その発展は外国の競争から国内工業を保護する高い関税賦課に負っている。それは同工業部門の人々にすばらしい利益を保証し、この保護の下に国内外の人々が年々ウ

第1表 ウッジ市の定住人口

1820年	767人
1830	4,238
1835	6,571
1840	16,415
1845	14,585
1850	15,565
1855	24,560
1860	29,450

J. Raciborski, "Łódź w 1860 roku," *Rocznik Łódzki*, t. II, Łódź, 1931, s. 414.

ウッジ市に定住し工業に従事した。住民数が増すと同時に織機が、つまりは特に綿織物工業がそれに伴う手工業とともに増大し、市は今日あるような状態にまで興隆した¹⁾——ウッジ市発展の背景はこの記述の中にまさに端的に示されている。その綿工業ではかなり早くから機械を使用する工場が建設され²⁾、繊維関係の職業別人口構成を見ても、織物製造・染色・織物仕上げ・ネクタイ製造等の専門職種に数えられる労働者ないしは手工業者の増加に比して日雇労働者・下僕といった未熟練労働者階層の急増ぶりは際立っており、1850年代には半数を越えて同年代末には四分の三以上を占めるに至っている³⁾。

⁴⁾他の都市、例えばパピャニツェ市の場合も、1820年に800人強だった人口が40年には約3,000人、60年には約5,000人とこれも非常な増加を示しているが、その原因は、当時の市長の「市の成長は専ら綿・絹綿交織・綿毛交織製品工場の好況・不況にかかっている」との言葉からもわかるように、やはり綿工業の発展であった。また住民の生計手段も、1817

- 1) J. Raciborski, "Łódź w 1860 roku," *Rocznik Łódzki*, t. II, Łódź, 1931, s. 407. なおこの記述には次のような郡長の注が付されている——「その上、上述の諸理由の他に、今日では小額の地代に比してその価値が非常に高まってきた永代借地取得の容易さも、また人口増加に大いに貢献した」。 *ibid.*
- 2) そのため、1860年に「市の発展は今後も続くであろうが、ただ周囲の森林以外に燃料資源がなく、安価で豊富な石炭を獲得するために鉄道網の充実が必要である」と、燃料に関する将来の危惧が表明されている程である。 *ibid.* s. 413.
- 3) 前掲拙稿第1論文「ポーランド王国における繊維工業の成立」(昭和51年) 69ページ以下。
- 4) 以下については前掲拙稿第2論文「ポーランド王国における工業都市の成立」(昭和52年) 62ページ以下を参照。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

年の段階では農業と手工業、20年には手工業が主で7人の毛織物業者のものを除いて工場はなくそれも貧困な状態にあるといわれていたものが、60年になると主要生計手段は綿工場経営であると明言されるまでになっている。その他のズギェシ、コンスタンティヌフ、トマシュフ・マゾヴェツキ各市でもかなり急激な人口増加を見ることができるが、¹⁾ その要因もそれぞれ綿・羊毛等の繊維工業の発展であった。

ところで、これら諸都市の人口構成に注目してみると、そこにひとつの特色を見出すことができる。前述のように、ウッジ地帯の成立には国外からの手工業者・工業家の

移入が大きな役割を果たしたが、各市の民族別・宗教別人口構成（第2表・第3表）がそれを裏付けている。何よりも目立つ

第2表 民族別人口比率（1860年）

（%）

	ウッジ	パピャニツェ	ズギェシ	コンスタンティヌフ	トマシュフ・マゾヴェツキ
ポーランド人	43.1	71.1	43.6	41.5	38.6
ユダヤ人	15.5	—	21.6	—	37.9
ドイツ人	41.4	28.9	34.7	58.5	23.5
ロシア人	0.0	—	—	—	0.0

J. Raciborski, *ibid.* s. 407, 414 および *Źródła do historii miast łódzkiego okręgu przemysłowego w XIX w.*, opr. R. Kaczmarek: *Materiały do historii miast, Przemysłu i klasy robotniczej w okręgu łódzkim*, pod red. N. Gąsiorowska t. II, Warszawa, 1958, s. 253—372 により作成。表中、パピャニツェ、コンスタンティヌフ両市のポーランド人にはユダヤ人も含まれる。ズギェシ市には他に2名の改宗者がいる。

第3表 宗教別人口比率（1860年）

（%）

	ウッジ	パピャニツェ	ズギェシ	コンスタンティヌフ	トマシュフ・マゾヴェツキ	王国全体
ローマ・カトリック	42.5	57.2	43.3	27.8	27.4	76.0
プロテスタント	41.4	23.6	34.7	47.4	34.6	5.5
ユダヤ教	15.5	16.2	21.6	24.8	37.9	13.5
ギリシャ正教	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	—
その他	0.6	3.0	0.4	0.0	0.0	5.0

資料は第2表に同じ。ただし、王国全体の比率のみは G. Missalowa, *Studia nad Powstaniem Łódzkiego Okręgu Przemysłowego 1815—1870*, t. II, Łódź, 1967, s. 78 に基く。

1) ちなみにパピャニツェ以下4都市の1860年の人口は、各々4,925人、12,016人、3,238人、5,371人であった。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

のはドイツ人の多さであり、ウッジ市で40%以上、歴史の浅いコンスタンティヌフ市などでは人口の半分以上を占めている。また、第3表の王国全体での比率が示すとおり、元来ローマ・カトリック教徒の居住するこの地方でのプロテスタントの比率の高さ（当然それはさきのドイツ人の比率とほぼ一致する）も、これらの諸都市にいかんドイツ人の移住が多かったかを物語っている¹⁾。一方、ウッジ地帯にとって市場として極めて重要なロシアについては、第2表にも見られるように、この時期同地帯に労働者ないし企業家を提供するということはまったくなかった。

諸都市の定住人口については以上のような状況であったが、他方、一時的に流入し滞在する者が、ウッジ市で3,189人（1860年、そのうち国外から48%、国内から52%）、パビヤニツェ市で年間600人、ズギェシ市で年間1,200人、コンスタンティヌフ市で年間50~400人、トマシュフ・マゾヴェツキ市で1,200人存在しており、これらの人々は専らそれぞれの繊維工業に雇用されていた²⁾。

IV 1828年の繊維工業状況

ここではウッジ地帯を擁するマゾヴェツキ州について、1830年の動乱前の繊維工業の状況を1828年に出された『繊維工業報告』³⁾によって分析するが、この時期は前述の手厚い工業育成策と有利な関税事情の恩恵を十分に受けていた時代で、積極的な工場誘致策が実を結んで各市に次々と工場が建設され、一方ロシアへの輸出も年ごとに急増していた。

後述のように当時ウッジ地帯では綿工業はまだ成長の途についたばかりで、羊毛工業なく毛織物工業が繊維工業の中心であった。第4表はその1828年に至る数年間のロシア向け輸出高を示したものである。見られるごとく7年間で23.5倍とかなりのペースで輸

- 1) このドイツ人移住者の内実については若干問題もあるが（G. Missalowa, *ibid.* — 第3表を見よ——s. 49以下）、ともかくその出身地ではザクセンとチェコおよびプロイセン支配下の旧ポーランド領が多かった。ウッジ市の場合、ドイツ人は専ら工場主ないしは手工業者として、1825~30年、1837~45年の2波の時期に集中してやって来たと言われている。Początki rozwoju kapitalistycznego miasta Łodzi (1820—1864), opr. A. Rynkowska: *Materiały do historii miast, przemysłu i klasy robotniczej w okręgu łódzkim.* pod red. N. Gąsiorowska, t.IV, Warszawa, 1960, Nr 56 s. 86.
- 2) なお拙稿第2論文, 68ページ参照。
- 3) *Raport prezesa Komisji Wojewódzkiej Mazowieckiej o stanie Przemysłu włókienniczego w r. 1828*, wyd. Z. Lorentz, "Rocznik Oddziału Łódzkiego Polskiego Towarzystwa Historycznego" II, Łódź 1930, s. 173—192.

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

出が増大しており、ウッジ地帯における同工業の成長とロシアへの進出ぶりがうかがわれる。

1828年の輸出は手織物生産総高12万バレルの約53%にあたり、額にして1,521万ズウォティに達する（ちなみに7年間の合計では6,048万ズウォティとなる）。

このようにして発展してきた毛織物工業も、1815年の王国成立当時にまで遡ってみれば、スキェルニェヴィツェという所に織工数十人を抱えて破産した工場がひとつあるのみで、その他には各都市に細々と毛織物を生産する織物職人

が少数居住していたにすぎない。しかしやがて外国から織物業者が移入し始めると、まずオゾルクフ、アレクサンドゥルフ両市が興隆し、1820年から23年にかけてコンスタンティヌフ、トマシュフ・マゾヴェツキ、ズギェシなどの各都市も新たに成長を開始する。1823年の初めには1,187人の織物業者と同数の織機を数えるに至り、1828年末にはその数は2,473人に達した。生産高も同年毛織物359万エル、カシミア・ラミヤ等2.8万エル、モルトン・フランネル等28.3万エルにのぼっている。¹⁾

一方新しい工業部門である綿工業は、王国内の毛織物業者の成功に刺激されて1824年以降チェコやザクセンから移住した織工たちによってこの地帯にもたらされたが、当時禁止的保護関税策にもかかわらず綿織物の密輸が容易であったことやロシアからも製品が流れ込んできたこと、さらに王国のあらゆる綿製品がロシアに締め出されていたことなどのために所期の成果をあげることはできなかった。しかし1828年に至って王国産の薄地綿織物の価格引下げに成功すると販売競争でロシア製品を駆逐するようになり、ようやく王国綿工業は活況を呈すとともに織工の生活も向上して、国内外に広がったそのうわさが一層移住者を引き寄せた。²⁾

第5表はマゾヴェツキ州主要都市の繊維工業を示したものである。³⁾ 表からは各都市の工

第4表 ロシア向け毛織物輸出

1822年	2,697 バレン
1823	13,307
1824	22,910
1825	42,001
1826	50,820
1827	59,588
1828	63,382

Raport Prezesa Komisji Wojewódzkiej Mazowieckiej o stanie Przemysłu włókienniczego w r. 1828, s. 180.

1) *ibid.* s. 176—177.

2) *ibid.* s. 178.

3) 表中、工場・手工場ないし作業場は必ずしも区別されていない。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

第5表 1828年の織維工業

都 市	総 人 口	綿・綿麻交織工業					羊 毛 工 業								
		工 業 人 口	紡 錘 数	織 機 数	綿 糸 (ポンド)	各 綿 織 物 (エル)	工 業 人 口	紡 錘 数	織 機 数	縮 絨 機 数	剪 毛 機 数	起 毛 機 数	圧 絨 機 数	染 色 槽 数	細 中 太 糸 (エル)
ウ ッ ジ	4,909	1,594	3,104	315	52,920	274,097	385	1,800	42	4	8	4	8	129,200	700
ズ ギ エ シ	8,872	—	—	—	—	—	5,281	15,900	437	51	153	7	40	815,880	10,000
オ ゴ ル ク フ	5,669	4	—	3	—	200	3,150	15,791	389	28	124	7	29	732,350	7,230
アレクサンドルフ	3,871	—	—	—	—	—	2,104	12,740	260	18	64	—	12	330,910	4,950
コンスタンティヌフ	2,825	4	—	4	—	7,400	1,337	6,940	200	—	72	—	7	430,000	—
トマシユフ・マゾヴェツキ	1,646	—	—	—	—	—	801	4,160	177	16	118	8	13	152,754	5,976
六 都 市 計	27,792	1,602	3,104	322	52,920	281,697	13,058	57,331	1,505	117	539	22	105	2,591,094	28,856
州 合 計	90,452	2,113	5,430	563	78,436	377,184	18,178	85,693	2,473	240	808	32	163	3,590,323	321,636

ibid. s.192による。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

業内容が際立った対照をなしていることがうかがわれる。すなわち、ほとんど羊毛工業のみの他の諸都市に対して、ウッジ市だけは生産高・工場施設・就業人口どれをとっても綿工業の方が優位にあり、前節でも触れたように同市がその歴史の極く初期から綿工業を主軸にして発展していったことがわかる。当時ウッジ地帯全体（ただしここでは地帯を含む州全体）としては綿工業のウェイトはまだかなり低く、その中にあってまだ小型ながらウッジ市のみが未来のこの地帯の主要産業綿工業を先取りして、将来の地帯のリーダーたるべく繁栄に向けて歩を進めつつあったのである。

ウッジ市の綿工業についてみると、紡錘数約3,000錘（他に亜麻紡績用糸車が450台）、各種織機が300台強、その他に漂白所が4ヶ所、染色槽18台、捺染機・艶出機・毛焼機が各一台、靴下織機が19台存在しており、綿糸約5万3千ポンド（うち45%は撚糸で残りは織布用綿糸）、各種綿織物27万4千¹⁾エル、ハンカチ・ショール14,140枚、綿麻交織の白リンネル2,420反、綿麻交織織物14,555反、リボン2,880片、その他2,335エルを生産していた。²⁾ウッジ市以外では、オゾルクフ市で織機3台によりシーツ用織布200エル、麻製品（無地リンネル・白リンネル・デニム）2,720エルが生産され、コンスタンティヌフ市で4台の織機によってギンガム6,000エル、シーツ用織布1,400エルが生産されていたにすぎない。

羊毛工業に関しては、表に見られるようにウッジ市を除き各都市とも綿工業に比べて格段に充実した工業内容を示している。まずウッジ市では、48台の紡績機（紡錘数1,800）、織機42台その他の施設を有し、細糸毛織物7,200エル、中糸毛織物22,600エル、太糸毛織物99,400エル、モルトン・黒紗700エル、ハンカチ60枚を生産していた。ズギェシ市では、紡績機383台（紡錘数15,900）、織機437台その他の設備で、細糸毛織物86,120エル、中糸毛織物276,550エル、太糸毛織物453,210エル、婦人用ラシャ10,000エルが生産され、オゾルクフ市では、375台の紡績機（紡錘数15,791）、389台の織機等の設備で、細糸毛織物20,400エル、中糸毛織物240,700エル、太糸毛織物471,250エル、カシミア3,000エル、フランネル1,400エル、ボア1,330エル、モルトン・黒紗750エル、鞍覆750エルを生産していた。アレ

1) その内訳は、ギンガム176,650、シーツ用織布46,650、南京木綿23,000、白ペルカル19,110、ピケ3,162、ファスチャン2,775、綿モスリン1,210、畝織木綿320、綾織物320（単位：エル）。

2) 他に麻製品として無地リンネル40,055エル、白リンネル1,700エル、デニム1,845エル、麻織物2,406エルが作られている。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

クサンドルフ市では、311台の紡績機（紡錘数12,740）と260台の織機等の設備で、細糸毛織物63,030エル、中糸毛織物43,840エル、太糸毛織物224,040エル、婦人用ラシャ2,970エル、フランネル1,980エルが生産され、コンスタンティヌフ市では、202台の紡績機（紡錘数6,940）、200台の織機その他で、細糸毛織物18,000エル、中糸毛織物119,750エル、太糸毛織物292,250エルが作られ、トマシュフ・マゾヴェツキ市では、78台の紡績機（紡錘数4,160）、177台の織機その他の設備で、細糸毛織物135,730エル、中糸毛織物16,874エル、太糸毛織物150エル、その他5,976エルを生産していた。

羊毛工業の諸設備には新旧様々なものが入り雑っているが、その革新の度合は都市によって差異がある。前記6都市のうちトマシュフ・マゾヴェツキ市は新興都市だけにかえって技術革新の進展が見られ、例えば、細・中・太糸を合わせて毛織物生産が州全体の22.7%（6都市合わせれば72.2%）と最も多いズギェシ市で機械施設も馬力巻上機5台（馬21頭）、水力機械9台（水車13基）とやはり一番多いものの（さらに生産第2位のオゾルクフ市がそれに次ぐ）、毛織物生産わずか4.3%のトマシュフ・マゾヴェツキ市に水力機械5台（水車4基）が存在している。その外、新式のオランダ型縮絨機を備えているのは同市だけだし、圧絨用ローターや染色槽について最も金属製装置の割合の多いのも同市である。さらに他の諸都市では毛織物生産のうち太糸のものが最も多いのに、¹⁾トマシュフ・マゾヴェツキ市では細糸毛織物の方が多くなっている。²⁾

以上のごとく、この1828年の段階では、関税政策の保護の下に羊毛工業とりわけ毛織物工業がすばらしい勢いで発展しており、その技術革新はなお進行中であった。一方綿工業の方は、ようやく国内市場をロシア製品から奪い返しつつあったとはいえ、当時はまだ小都市のウッジ市に成長の兆しを見出しうるにとどまり、その本格的発展は将来のことに属していた。このような状況は、1830年に始った国内の動乱とその後の経過の中で大きく変貌をとげ、ウッジ地帯はやがてウッジ市を中心とする一大綿工業地帯として新たな発展期を迎えることとなる。

-
- 1) 細・中・太糸の順に、前記6都市で12.8%、27.8%、59.4%、州全体では11.4%、29.1%、59.5%の割合になっている。
 - 2) 同市では細・中・太糸の順に、88.9%、11.0%、0.1%の割合である。また、前述のように同市の毛織物生産は州全体の4.3%であるが、細糸毛織物に限れば州の33.2%を占めている。

V 1860年の繊維工業状況

1830年の動乱の後しばらく停滞していた王国繊維工業も、50年代になると次第に立ち直ってくる。ここでは1860年に実施された各都市へのアンケート調査¹⁾によって当時の繊維工業の状況を分析するが、この段階は、繊維工業が新たな展開を示し始め、後に鉄道網建設・農奴解放・金関税導入等を経て本格的に飛躍を開始するいわばそのスタート・ラインにあたる。

第6表はウッジ地帯5都市についてその繊維工業の状況を大まかに示したものである²⁾。この時期になると、ウッジ市が明白に地帯のリーダーとしての姿を現わし、人口についても前に触れたように他の都市を完全に凌駕していた。また同市の綿工業は、1828の段階と比べると格段の飛躍をとげており、それがすでに地帯の“顔”となりつつあった。

同市の各繊維工場の様子は第7表に示されている³⁾。綿工業のうちまず Geyer の工場は、綿紡績をはじめ織布・捺染・染色と幅広い生産を行っており、生産額も約30万ルーブルと極めて巨大である。同工場では綿紡績のために90馬力の蒸気機関が2台使用され、さらに綿毛交織布生産と捺染のために30馬力の蒸気機関が使用されていた。主な製品は綿糸で541,000ポンド生産され、白金巾とファスチャンがそれぞれ45,000アルシン⁴⁾、サラサ1,100反、光沢麻布4,700反、その他141,500アルシンも作られている。次に Scheibler の綿紡績工場では、60馬力の蒸気機関を用いて458,000ポンドの綿糸が生産された。同じく Lande の工場では、30馬力の蒸気機関によって綿糸211,000ポンドが生産され、Grohman の工場では、水力と18馬力の蒸気機関によって綿糸158,000ポンド、綿織物70,100アルシンが生産され、Moes の工場では、30馬力の蒸気機関と水力によって綿糸171,000ポンドが作ら

- 1) *Źródła do historii miast łódzkiego okręgu przemysłowego w XIX w.*, opr. R. Kaczmarek: *Materiały do historii miast, przemysłu i klasy robotniczej w okręgu łódzkim*, pod red. N. Gąsiorowska, t. II, Warszawa 1958, Nr 61—80, s. 221—372 および J. Raciborski, *ibid.*, s. 397—416. なお拙稿第2論文(昭和52年)60ページ以下を参照。
- 2) ウッジ市を除く4都市についてはすでに前掲拙稿第2論文(69ページ以下)で分析しており、本稿はそれと重複している。
- 3) 第6表のウッジ市のデータはこの第7表を集計して得たものである。なお、第7表中所有者欄に記名がなく代わりに数字のあげてあるところは、当該種類の小工場の所有者数を示している。
- 4) アルシンはロシアの長さの単位で1アルシン=28インチ。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

第6表 1860年の繊維工業

工場 (数)	ウツジ			パビヤニツエ		ズギエシ			コンスタンティヌフ		トマシユフ・マゾヴェツキ	
	綿 (789)	羊毛 (17)	その他 (25)	綿・綿麻交織 (18)	綿毛交織 (2)	綿 (?)	羊毛 (?)	絹 (1)	綿 (?)	羊毛 (5)	綿 (10)	羊毛 (67)
生産額 (ルーブル)	1,881,760	486,780	111,790	490,768	102,650	38,000	624,000	20,000	499,560	85,900	26,097	631,230
親方	1,892	26	30	378	10	32	116	14	158	5	10	76
職人	1,288	192	72	639	186	68	461	?	246	45	28	207
徒弟	485	14	13	138	4	10	62	?	432	10	26	57
日雇・その他	2,399	298	76	513	126	?	917	?	122	80	23	224

Łódź w 1860 roku (Źródła), s. 415—416, および Źródła do historii miast łódzkiego okręgu przemysłowego, s. 253—372による。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

第7表 ウッジ市の繊維工場 (1860年)

	所有者	親方	職人	徒弟	日雇	製 品	生産額 (ルーブル)
綿 工 場	Ludwik Geyer	15	82	—	449	綿糸・白金巾・ファスチャン サラサ・光沢麻布・その他	297,900
	Karol Scheibler	5	36	—	74	綿糸	206,100
	Dawid Lande	4	16	—	142	綿糸	94,995
	Traugut Grohman	16	28	—	59	綿糸・綿織物	81,655
	Fryderyk K. Moes	4	11	—	70	綿糸	76,950
	769	1,829	998	485	1,442	スカーフ・その他	928,045
	15	20	117	—	163	捺染布	196,115
羊 毛 工 場	Jakób Peters	5	28	—	112	羊毛糸・染色布・漂白布	154,320
	14	19	156	14	121	婦人服・メリノ毛織物・フランネル 家具覆・鞍覆・スカーフ・その他	212,380
	2	2	8	—	65	羊毛糸	120,080
そ の 他	Leonard Fesler	6	40	—	54	捺染布・染色布	98,800
	1	1	4	2	7	亜麻布・卓布	3,530
	10	10	16	4	6	リボン	2,450
	13	13	12	7	9	靴下・ソックス・ナイトキャップ ジャケット・婦人用ガウン	7,010

Łódź w 1860 roku (Źródła), s. 415—416による。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

れていた。その他の小工場では、綿・綿毛交織布7,085,945アルシン、スカーフ139,042枚、¹⁾ 擦染布39,223反が生産されている。

次に羊毛工業では、Peters の工場が12馬力の蒸気機関によって紡績・染色・漂白・仕上げを行ない、羊毛糸76,100ポンド、擦染布30,000反、漂白布30,000アルシンを生産していた。その他の小工場では、婦人服地 52,040アルシン、メリノ毛織物 5,300アルシン、フランネル27,860アルシン、家具覆34,700アルシン、鞍覆14,000アルシン、スカーフ33,410枚、その他46,740アルシン、および羊毛糸93,400ポンドが生産されている。

以上の外、Fesler の工場が10馬力の蒸気機関を用いて織物の擦染・染色を行っていたが、擦染布 17,000反、染色布 6,900反を生産した。他の小工場では、亜麻布 5,660アルシン、卓布3,330アルシン、リボン30,640片、靴下22,810足、ジャケット等1,895反の生産が行なわれている。²⁾

ところで、前述の繊維工場では生産にあたって原棉や染料は外国から購入され、製品の販売は王国内各都市やロシアでなされた。ただし、綿・羊毛とも紡績糸の場合は周辺諸都市の織物業者に対して販売されており、この点で地帯の加工原料供給者としてのウッジ市の性格が現われている。

次にパピャニツェ市の繊維工業を見てみると（第6表）、綿工業を中心にかなりの生産が行なわれていることがわかる。³⁾ 2つの綿毛交織工場では、家具覆用の波紋織15,480アルシンとその他 410,400 アルシンを生産しており、18の綿・綿麻交織工場では白キャラコ 2,794,990アルシン、コール天5,000アルシン、シーツ生地153,800アルシン、ファスチャン 4,800アルシン、南京木綿 607,130アルシン、その他の綿製品 508,300アルシンを生産している。同市の工場の原料はプロイセン、イギリスなどから購入され、製品はワルシャワ、ルヴリンその他の王国内諸都市や時にはロシア西部諸州で販売された。同市における最も重要な工場は Benjamin Krush 所有の綿工場で、そこでは24馬力の蒸気機関を用いて50

- 1) これら中小の工場でも一部で蒸気機関が使用されていた。
- 2) これらの繊維工場の他に、ウッジ市には、市内や周辺地域での消費を目標とした馬車製造工場・蒸留所・レンガ製作所・酢製造所・製油所・蒸気製粉所等が存在していた。
- 3) 同市には製糖工場やアルコール蒸留所は全く存在せず、綿工場以外にめぼしいものとしては、生産額 1,400 ルーブルのビール醸造所がひとつと、4基の製粉用風車が見られるのみである。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

台の機械織機が繰業しており、綿・綿毛・綿麻交織布が生産されていた。

ズギェシ市では依然として羊毛工業が有力で、ラシヤ144,000アルシン、コール天140,000アルシン、フランネル1,500アルシン、および機械による羊毛糸128,000ポンドを生産している。原料羊毛は王国内で購入されたが、染料のみは外国で調達され、製品販売は一般には王国内、一部がロシアでなされた。主な羊毛工場には、**Henryk Reyber**（毛糸生産額100,000ルーブル、うち機械生産30,000ルーブル）、**Ernest Kuntz**（生産額40,000ルーブル、うち機械生産25,000ルーブル）、**Wilhelm Cyppel**（生産額65,000ルーブル、うち機械生産20,000ルーブル）、**Antoni Długoszewski**（生産額56,000ルーブル、うち機械生産15,000ルーブル）の蒸気力使用の各工場がある。一方綿工業でも機械が使用され、キャラコ38,000ルーブルを生産している。その原料には、すでに綿糸となったものが **Wilhelm Zacher** の綿糸工場をはじめとする市内やウッジ市の工場から購入され、原料棉花そのものも外国から購入された。その他、**Edward Hauzer** 所有の絹工場で20,000ルーブルの生産が行なわれ、大部分をロシアで販売していた。

コンスタンティヌフ市の5つの羊毛工場ではラシヤが2,340反生産され、1つの工場では蒸気機関も使用されている¹⁾。原料羊毛は王国内近隣地域から買い集められ、製品は王国内とロシアに販売された。一方綿工業の生産は46,173反で、原料綿糸はウッジ市の工場から購入し、製品は王国内とロシアに販売している。

トマシュフ・マゾヴェツキ市では、羊毛工場の原料羊毛はワルシャワの年市と地主達から購入され、綿工場の原料綿糸はウッジ市内の工場から購入された。製品販売は、主に外来の商人によってワルシャワや王国・ロシアの諸都市でなされていた。主要な工場は **Aleksander Hasterman** と **Adolf Elbel** の水力羊毛紡績工場²⁾で、後者には水力不足に備えた蒸気機関も装備されている。

以上のごとく、1860年代になるとウッジ地帯の様相も次第に変わり、繊維工場に機械の導入が進むとともに、ウッジ市を中心に地帯の構成自体もかなり変化してきていることがわかる。何よりも綿工業のウエイトが高まり、また原料購入・製品販売をめぐって、諸外国や国内市場との結びつきが明確になってくる。今や、有機的結合の核をウッジ市に求め

- 1) 同市最大の **Gotfryd Wend** 所有の羊毛工場が10馬力の蒸気機関を有していた。
- 2) 同市には繊維工場¹⁾の他、市内・周辺地域向けに24,500ガロン（生産額3,660ルーブル）を生産する大規模なビール醸造所がひとつある。

19世紀ポーランド王国の資本主義工業

たウッジ地帯は、その地帯として内包する特質をあますところなく示しながら、大きな飛躍へのスタートを切ったのであった。

VI 結 語

ポーランド王国の誕生は、三国分割によって消滅した民族国家再建への一里塚であったとともに、混乱し停滞した社会的・経済的環境の中で国民経済形成の大きな柱となった。その移住手工業者優遇策と保護的関税政策は、受け継ぐべき工業的遺産を持たなかったポーランドに、新たに羊毛工業を定着させた。1830年の動乱を契機としてそれは綿工業に引き継がれるが、そこにはさらに大きな飛躍の可能性が開かれていた。

王国繊維工業の繁栄はウッジ地帯の発展に象徴される。動乱以前羊毛工業を中心に飛躍的に発展した同地帯は、その後の工業極造の転換をも鮮やかに成し遂げ、19世紀後半の王国経済を担うエネルギーな結合体として着々と地歩を占めてゆく。

同地帯には、王国工業のもつあらゆる特質が具わっていた。王国政府の工業育成策を受け止め、工業の成立と発展を支えた2つの要素——つまり市場としてのロシアの存在と、ドイツ方面からの工業移住者の働きが、この地帯の生みの母でもあったのである。それ以前に国家的中枢を欠いていたため、ポーランドの国内市場の確立は王国成立以後の課題となったが、それと並行する形でロシア市場との結合も早くから進んだ。繊維工業の発展はロシア市場の拡大によってその基底的可能性を開かれ、その意義は時とともにますます重要となってゆく。一方で、同地帯における非常に多くのドイツ人労働者やドイツ系企業家の存在が、繊維工業成立の他方の特色を示唆している。——これらの事実こそ、ポーランド王国資本主義工業発展の秘密を解く鍵をわれわれに与えてくれるものにちがいない。そこから以後の一層の工業発展を予想することができるが、一面、工業成立をめぐる特質としてポーランド王国内部の伝統的な社会経済的基盤との接合の如何が、将来の王国工業の運命を握っているように思われる。